

第四部 第7巻～第9巻

金子明雄

1 『貼雑年譜』第7巻～第9巻の概要

『貼雑年譜』の第7巻から第9巻は、多少の前後、重複を含めて、それぞれが以下の期間の情報で構成されている。

第7巻：1957年7月～1959年12月（1960年追加分を含む）

第8巻：1960年1月～1962年4月（1958年以降の『宝石』口絵ページ補遺を含む）

第9巻：1962年1月～1964年4月

中心を占めているのは新聞・雑誌等のメディアに掲載された乱歩本人の登場する記事の切り抜きであり、出版物の帯やパンフレット、映画・演劇等のポスター、パンフレットやフライヤー、公私に亘るさまざまなイベントの案内や会合の資料などが加えられる。ところどころに乱歩の手書きコメントが書き込まれるが、その分量は極めて僅かである。

乱歩は、『宝石』に連載した「探偵小説三十年」の最後の部分（1956年1月）で、「昭和十七年以降の資料整理がまだ出来ない」としており、その後、一定程度の資料を整理した上で、「探偵小説三十五年」と改題しての連載を1956年4月から1960年6月まで続け、1956年までの事項を記述している。さらに、1961年7月に桃源社より出版された『探偵小説四十年』に「昭和三十六年三月執筆」として「昭和三十二年以降」の部分が書下ろしで追記されたことから考えると、第7巻以降の記事は比較的リアルタイムに近い時期に貼られた可能性が高いと思われる。

1957年から1964年までの乱歩は、探偵作家・批評家として、かなりの数の少年ものの他、桃源社の書下ろし推理小説全集第一巻として刊行された『べてん師と空気男』（1959.11）、東都書房から刊行された日本推理小説大系第二巻『江戸川乱歩集』（第一回配本、1960.4）、『探偵小説四十年』（桃源社、1961.7）、桃源社版『江戸川乱歩全集』（全18巻、1961.10～1963.6）などを出版。編集者としては、低迷が続いていた『宝石』へのてこ入れのため、1957年8月号より直接編集を担当することになり、宝石社から1959年8月に創刊された『ヒッチコック・マガジン』の運営にも関わった（結局、『宝石』は1964年5月号をもって廃刊、宝石社は倒産という結末に終わる）。作家団体の組織人としては、探偵作家クラブの社団法人化に尽力し、1963年1月31日付で社団法人日本推理作家協会が認められ、乱歩は初代理事長に就任する。また、日本文芸家協会の言論表現問題の委員も務めた。その他、東京・池袋ロータリークラブ、宇宙旅行協会、日本のローマ字社、劇団テアトル・エコー後援会、童謡歌手小酒井ちはや（小酒井不木の孫）後援会な

ど、幅広い社会的活動を行っており、1961年11月には紫綬褒章を授与される。その一方で、1958年の暮れに高血圧症が発覚し、飲酒を控えるなどの生活の変化が生じ、恒例となっていた新年会開催も、1959年以降は断念を余儀なくされる。また、1960年10月には、昭和の初めから悩まされていた蓄膿症の再手術を受けるが、予後が思わしくなく、体調不良の状況が続いていた。

『貼雑年譜』に貼られた資料は、この期間の乱歩の活動をかなり忠実に再現するものになっているが、その中で注目すべき点をいくつか指摘しておきたい。

2 ラジオ、テレビ、文士劇への出演

この時期、従来からのラジオはもちろん、1953年に放送が開始されたテレビもコンテンツの拡張期にあり、乱歩作品がドラマ化されるのはもちろん（ラジオでは「十字路」「人間椅子」など、テレビでは「月と手袋」「心理試験」「怪人二十面相」シリーズなど）、単にゲストとしてインタビューを受けるのではなく、探偵作家としての役割を期待される「私だけが知っている」（NHK）、「この謎は私が解く」（KR テレビ、7_036-1）や「スリラー劇場」（毎日放送、7_080）などのミステリー風味のプログラムも次々に登場した。それらの紹介（番組表を含む）や短評記事も『貼雑年譜』に取り込まれている。また、乱歩作品を原作とする映画や演劇も多数におよび、東映で少年探偵団もの（『少年探偵団 二十面相の復讐』『少年探偵団 首なし男』『少年探偵団 敵は原子潜航艇』など）が継続的に制作されたほか、三島由紀夫が戯曲化した『黒蜥蜴』（制作吉田史子、演出松浦竹夫、出演水谷八重子・芥川比呂志）の上演（サンケイホール、1962.3）と大映映画『黒蜥蜴』（監督井上梅次、出演京マチ子・大木実）の制作（1962.3 封切り）が重なったことは、1961年から1962年にかけての大きな話題であり、そのポスターや報道、批評は『貼雑年譜』にも数多く収められている。そのような流れの中で気になるのは、乱歩をはじめとする探偵作家たちの文士劇の枠を超えた自己露出・自己提示への意欲である。この時期、乱歩（探偵作家クラブ）は劇団テアトル・エコーを後援しており、劇団もこれに応じて探偵小説的な戯曲を上演しているのだが、乱歩らはそれを鑑賞するだけでなく、しばしば出演する側に回っているのである（例えば1958年2月の「婦人科医プレトリウス博士」（第一生命ホール）に乱歩、渡辺啓助、香山滋らが出演。7_038）。1959年3月7日には、エコーの会（劇団テアトル・エコー後援会）第1回つどいとして、探偵作家クラブ・日本医家芸術クラブによって上演された「スパイの技術」（キノール作、第一生命ホール）がKRテレビで録画中継される（7_099,7_100）。その他、1958年6月の劇団未来劇場第1回公演「ナイル河上の殺人」（砂防会館）に乱歩や木々高太郎が出演しており（7_060）、探偵作家クラブの後援による探偵劇専門劇団という触れ込みで旗揚げした劇団象牙座の、クリスティ原作「アクロイド殺害事件」（1958年10月、銀座ガスホール）でも乱歩や木々高太郎、高木彬光らの出演が予告されている（7_082）。それら、趣味・娯楽の範疇を逸脱するように思われる集団的な自己提示の意味については、もう少し考えてみる必要があるだろう。

3 読者、新人探偵作家の動向

また、数多くの資料の中でいささか異質な印象を生み出しているのは、読者の動向に関する記事の多さである。小中高校生の読書傾向についての定期的な調査結果を伝える記事や貸本屋の動向についての記事、地方の公立図書館や学校図書館の動向、女性の読書傾向や探偵小説趣味に関する記事などが、相当な点数貼り込まれているのである。もちろん、大抵の場合、よく読まれる作品として少年探偵団ものなどが挙げられ、乱歩の名前が記されており、その部分が赤鉛筆でチェックされているのだが、記事の全体からすれば、それらはほんの僅かな部分であり、単に自己の存在を確認するというだけではない意味があると考えるのが適当であろう。少なくとも、己の活動を創作や出版で完結させるのではなく、作品を読者に届けることに向けて開いていく意識、いうならばコンタクト志向の強さを認めることができよう。

他方で、『貼雑年譜』には他の探偵作家の動向に関する記事も多く、江戸川乱歩賞の受賞者に関する記事も必ず集められている。その中で、仁木悦子（第三回、1957）の受賞作「猫は知っていた」の映画化に関する記事（7_048）、新章文子（第五回、「危険な関係」1959）の受賞記事（7_138）、陳舜臣（第七回、「枯草の根」1961）の受賞記事（8_057-1、8_058）が、それぞれかなりのスペースを割いて並べられるのだが、実はそれらのページには共通して、その他にたくさんの記事があるので本人に送ったという旨の書き込みがなされている。このことは、われわれにいろいろなことを考えさせてくれるだろう。まず、自らの名前を冠した賞を与えた後進を励まし、育てようとする先輩作家としての温かい心持が認められるのはもちろんである。作家本人が読んだこともないような地方紙の記事が多数送られてきて、斯界の大先輩が作家本人よりも無邪気に喜んでいる様子が伝わって来たら、後進が大いに励まされることになるのは間違いあるまい。その一方で、乱歩自身に、マス・メディアが代表している探偵小説の圏域の外側の人々からの注目や関心を重く受けとめる意識が認められることも興味深い。後進に先進（玄人）としての一言を手向けるよりも（それもしていたのかも知れないが）、多くの素人たちが抱いている興味・関心を伝えることを優先しているのである。さらには、『貼雑年譜』のその場所に、他にも関連記事があったという注釈を遺す行為からは、他者（読者）の目を意識した資料体＝作品としての『貼雑年譜』の完全性への意識が感じ取られる。新聞記事の切り抜きを提供する業者（切抜通信社）を使っていたにもかかわらず（7_137）、全体としては自ら集めた情報が中心になっている印象が保たれていることとも併せて考えると、『貼雑年譜』が乱歩にとってどのような作品であったかを推し測るヒントになるように思われる。

4 まとめにかえて

第7巻以降の時期、集められた記事の見出しにあるように、明らかに「推理小説ブーム」「文壇にミステリイ流行」（7_050）の状況が到来しており（乱歩自身が「探偵小説第四の山」（7_069）と呼ぶ状況）、そのようなブーム、流行の「台風の眼」（7_066）「プロデューサー」（8_009、8_010）に乱歩を見立てる発想はさほど不自然ではないし、乱歩自身、体調不良を抱えながらもその役割を果たそうとしていたことは間違

いない。しかしながら、読者の趣味・嗜好、読書傾向の変化に意識的であった乱歩は、「サザエさん」（『朝日新聞』1957.10.28、7_023）に描かれたような世の中の潮流の儚さも自覚していたに違いない。『貼雑年譜』第7巻から第9巻は、主に「推理小説」と看板を掛け替えつつあった探偵小説界の明るさを表象しているように見えるのだが、楽観的な空気感の底を眼差すひんやりとした視線の存在感を見逃してはなるまい。

その他、第7巻から第9巻には、乱歩が永井荷風ばりの姿を見せる、日劇ミュージックホール「夜ごと日ごとの唇」（ヌード連続殺人）への原作提供（7_082）や、デザイナー鴨居羊子のカラフルな男性用下着の広告まがいの記事に巻き込まれる「ピンクの下着でこませ」（8_027）、「ランボキトク」の電報によって多くの探偵小説関係者が混乱に陥った顛末を記した『週刊文春』の記事（9_047）など、興味深い話題が多々あるのだが、紙幅の都合があるので、心残りではあるがこのあたりで筆を擱きたい。